



TITLE:

第三史觀の概念(下)

AUTHOR(S):

米田, 庄太郎

CITATION:

米田, 庄太郎. 第三史觀の概念(下). 經濟論叢 1935, 40(3): 528-542

ISSUE DATE:

1935-03-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130569>

RIGHT:

京都市大學經濟學會 經濟論叢

第十四卷 第三號

昭和十年三月一日發行

論叢

鑛產稅附加稅の課稅權者……………法學博士 神戸正雄

預金の積極性と消極性……………經濟學博士 小島昌太郎

第三史觀の概念……………文學博士 米田庄太郎

時論

交換貿易制より見たる吾國の貿易……………經濟學博士 谷口吉彦

研究

ミロオの金なき國際交換決濟制_{に就いて}……………經濟學士 松岡孝兒

貨幣の轉回速度の構想に就いて……………經濟學士 有井治

貨幣自體の限界效用……………法學士 正井敬次

說苑

ウィリアム・ペティーの經濟說……………經濟學士 相澤秀一

支那のボイコットに就て……………經濟學士 黒松巖

景氣理論_{に於ける} シュピートホフとハイエク……………經濟學士 尹行重

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

第三史觀の概念（下）

米田 庄太郎

（一）高田博士の第三史觀の概念に就て、

（二）嚴密な論理的意味に於ての第三史觀の概念の一般的規定

二 嚴密な論理的意味に於ての第三史觀の概念の一般的規定

此處に嚴密な論理的意味に於ての私の第三史觀概念の概念を、一般的に規定せんとするに當つて、先づ史觀の一般的概念を規定して置きたいと思ふ。

我が國語にて史觀或は歴史觀と云へば、語學的に如何に解するのが正當であるかは、まだ私の研究して居ない問題である。併し私は史觀と云ふ語は、獨逸語の *Geschichtsauffassung* の譯語として始めて造られたものと考へて居るので、又私自身は常に *Geschichtsauffassung* の譯語として之を使用して居るのである。されば私が此處で史觀の一般的概念を規定せんとするのは、つまりは *Geschichtsauffassung* の一般的概念を規定せんとすることを、意味して居るのである。

今 *Geschichtsauffassung* と云ふ成語の意味を、出来るだけ精確に決定するに就て、先づ注目す

可きは、*Auffassung* と云ふ單語の學問上に於て用ひられて居る意味であると思はれるが、此の語は學問上一般的には、表象材料の受容、同化、精神的加工或は理解とか、與へられたるものをよく理解して判定する能力とかを意味して居るが、更に又主觀に依存する對象の考察仕方^{ベトラハツングスワイゼ}をも意味して居る。そして *Geschichtsauffassung* と云ふ場合に於ては、*Auffassung* と云ふ語は先づ「主觀に依存する對象の考察仕方」、一層詳しく云へば、主觀が與へられたる對象をよく理解して判定する能力によりて、主觀の一定の立場から、其の對象を考察する仕方を意味して居ると思はれる。かくて (*gesichtsauffassung*) の概念は、主觀が與へられたる對象をよく理解して判定する能力によりて、己れの一定の立場から歴史を考察する仕方を意味するものとして、先づ一般的に規定する可きであると思はれる。して見ると、*Geschichtsauffassung* に於ける *Auffassung* の意味は *Weltanschauung* や *Lebensanschauung* に於ける *Anschauung* の意味と、大體上同じものと見做し得られる。但し *Weltanschauung* とは、一般的には、物^{ディンゲ}の連結及び定存在^{ダザイン}の意味が理解され又解釋される仕方を意味し、一部分は性格や人格性に依存し、又一部分は倫理的、歴史的及び社會的に制約されて居るものと解されて居るのである。さればエンゲルスは「アンティ、ゾユリング」の中には、*die materialistische Geschichtsauffassung* を *die materialistische Anschauung der Geschichte* とも稱して居る。随ふて我が國語で *Weltanschauung* を世界觀と譯する様に *Geschichtsauffassung* を歴史觀或は史觀と譯し、かかる場合には *Anschauung* も *Auffassung* も共に觀と譯し

て居るのは、正當であると思はれる。尙ほ實質的にも世界觀と歴史觀との間には、甚だ密接な關係が存立して居るので、一方から見れば、世界觀或は人世觀は歴史觀或は史觀の基礎であるとか、或は之を其の一部として包括するものであるとか云ひ得らるれば、他方から見れば、歴史觀或は史觀は世界觀或は人生觀を人類史の解釋に於て具現するものであるとか、或は之を基礎として包含するものであるとか、云ひ得られると思はれる。

學問上の用語としての歴史觀或は史觀の一般的概念は、右に述べしが如きものであるとする
と、史觀とは本來哲學的なもの或は形而上學的なもの、或は世界觀的なもの、つまりは歴史哲學的學說、或は歴史形而上學的學說を意味するものにして、科學的史觀なるものは成立し得ないと思はれる。是れ哲學或は形而上學は本來哲學者の主觀或は人格性を離れては建設され得ないものにして、そうして何れの哲學體系の價值も、之を建設する哲學者の主觀或は人格性の價值によりて、根本的に制約されて居るものであるが、然るに科學は本來出来るだけ研究者の主觀或は人格性を沒却して、出来るだけ客觀的に考察することを生命とするものであるからである。尙ほ史觀は歴史哲學的學說として、更に歴史の全體を統一的に、出来るだけ唯一の根本的原理或は原因によりて、徹底的統一的に解釋することを其の目標となすものである。そうして此の點に於て又歴史哲學的學說としての史觀は、歴史の科學的研究或は説明とは異なるものにして、歴史の科學的研究或は説明は主觀の一定の立場から企てられるものでなければ、又科學的には決して把握さ

れ得ない歴史全體の唯一の根本的原因とか根本的原理とか云ふが如きものを求めるものでなく、出来るだけ事實に即して、出来るだけ種々の方面から、歴史的事象或は事實を一般的に説明或は究明せんとするものである。簡單ながら以上述べし事を總括して、吾々は史觀の一般的概念を、史觀とはつまり唯一の根本的原理或は原因を指定し、夫れによりて歴史の全體を出来るだけ徹底的統一的に解釋せんとする歴史哲學的學說であると云ふ様に、規定することが出来ると思ふ。

私は先づ史觀の一般的概念を以上述べし如くに規定して置いて、是れより私が嚴密な論理的意味に於て第三史觀と稱せんとするものの概念を、一般的に規定したいと思ふが、今私の見る處によれば、上に述べし如く、史觀は一の哲學的學科としての歴史哲學上の學說を意味するものとして、他の哲學的諸學科に於ける學說と同じく、一定の哲學的立場或は方針を根本的基礎として、其の上に建設されるものである可きである。何等かの哲學的立場或は方針を先づ第一に確立し、之を前定とするに非らずば、嚴密な意味での史觀は決して建設されるものでない。自分の史觀は何等の哲學的方針或は立場をも前定して居るものでなく、全く一定の科學の理論を基礎として建設されて居るものであるが故に、夫れは一の科學的史觀であると云ふ様に考へて居る人々があるが、併し學問論的に詳しく吟味して見ると、其の一定の科學の理論なるものは純粹な科學的理論ではなくして、潜かに哲學化されたものであること、又は夫れは純粹な科學的理論であるとしても、史觀の根本的原理として運用される場合には、潜かに哲學化されて居るものであることが、發見

されるところである。

私は簡單ながら右に述べし如くに、一切の史觀は根本的には何れかの一定の哲學的立場或は方針に基いて、建設されて居るものであると考へるのであるから、かくて一切の史觀は根本的には夫れが基礎或は前定とする哲學的立場或は方針の區別に従ふて、區別或は分類される可きものと認める。然るに少なくとも今日までの哲學の發達を考察すれば、一般に哲學の立場或は方針は、根本的には觀念論的立場或は方針と、唯物論的立場或は方針との二大方針に大別されて居るから、從來の一切の史觀は根本的には觀念論的であるか、又は唯物論的であるかの何れかであらねばならない。そうして今日までに現はれたものゝ史觀或は歴史哲學的學說中、若し觀念論的でも唯物論的でもない様なものがあるとすれば、夫れは中途半端なもので、まだ論理的に完成されて居ないもの、かくて一の完成せる史觀となる爲めには、（若し觀念論と唯物論との外に、如何なる哲學の根本的方針もないものとすれば）更に觀念論的に徹底されるか、又は唯物論的に徹底されなければならない、未成品であるに止まるものと云はる可きである。但し私の如くに哲學の第三の根本的立場或は方針を確立せんとするものにありては、事態は異なつてくる。此の事に就ては後に論述することとする。

此の點に就て今日の歴史哲學上注意す可きものがある。夫れはエンゲルスが唯物史觀なる語を以て、特にマルクスの經濟史觀を表示して以來、マルクス主義者がマルクスの經濟史觀を唯一の

唯物史觀であるが如くに主張し、常に兩者を同一視して論述して居ることから生ぜる思想上の一混亂である。云ふまでもなくマルクスの經濟史觀は唯物論的であらんとするもの、かくて唯物史觀であらんとするものである（但し嚴密に吟味すれば、果してそうであり得るや否やは後に論ずる）併しそうであるとするも、夫れは決して唯一の唯物史觀ではなく、夫れの外に幾多の唯物史觀が存立して居るのみならず、更に經濟史觀其物は必ずしも唯物史觀であらねばならないのではない。かの歐米の加特利教會内に廣く行はれて居るル・プレー派の社會學や史觀に於て見られるが如く、直接には地理的圓境及び夫れに依存する生産仕方或は經濟を、社會生活の根本的制約因素として重要視して居るが爲めに、一種の經濟史觀と稱し得られるが、しかも本來觀念論的である史觀も成立し得るのである。かくて唯物史觀（經濟史觀を意味するのであるが）は唯物論哲學と必ずしも結び附いて居なければならぬものでないとか、觀念論的な唯物史觀も存立し得るとか、云ふが如き意見を唱へる人々もあるのである。併し嚴密に考ふれば、觀念論的な唯物史觀と云ふが如き概念は到底論理的に構成し得られるものでない。唯物論哲學を基礎としない唯物史觀が論理的に成立し得ないのは、觀念論哲學を基礎としない觀念史觀の存立し得ないのと同様である。されば吾人は歴史哲學上嚴密な意味にて史觀を考察する場合には、經濟史觀を直ちに唯物史觀と同一視するマルクス主義者の偏見を無視し、夫れに拘束されない様注意せねばならぬ。

却說私は上に述べし如くに、今日までの哲學の發達に於ては、哲學の立場或は方針は根本的に

は觀念論と唯物論とに大別されて居るが故に、其等の根本的方針を基礎として建設される歴史哲學的學說としての史觀も亦、根本的には觀念史觀と唯物史觀とに大別される可きものと考へるのであるが、然るに哲學の根本的ニ大方針としての觀念論と唯物論との二者は、相互に他を排斥しつゝ相對立するものであるから、かくて史觀の根本的ニ大方針としての觀念史觀と唯物史觀との二者も亦、相互に他を排斥しつゝ相對立するものである。そうして今日までの史觀の發達に於ては、兩者の何れかの一が他を壓迫して優勢を振ふて居る時代があるが、併し全體として見れば兩者は常に相對立して存續して居り、更に將來に於ても、若し兩者を論理的に總合する第三方針が現はれるに非らずば、同一の形勢は何時までも持續するであらうと思はれる。處で近來私は觀念史觀と唯物史觀との兩者を、論理的に總合する史觀の第三方針が樹立され得ると確信して來たので、かくて私はかゝる史觀を第三史觀と稱したいと思ふのである。要するに私が第三史觀と稱せんとするものは、從來の史觀の根本的ニ大方針としての觀念史觀と唯物史觀との、兩者の各々に於て發揮されて居る總ての眞理を總括すると同時に、兩者の各々に於て見出される一切の謬見を排除して、私が新たに樹立したいと思ふ史觀上の第三の根本方針を意味するものであるのである。そうしてかゝる根本方針は、私自身の史觀的要求を最ともよく満足させるものであるが故に、夫れは私自身にとつては最高唯一の史觀方針であるのである。但し私は後に論述せんとする世界觀的或は哲學的人格典型説を基礎として論證せんとする如く、觀念史觀の種々な缺點を理論

的には意識して居ながらも、其の人の全人格性の奥底から自から生ずる深大な世界觀的要求に従ふて、如何様にかして觀念史觀を固持せざるを得ない様な人々があると共に、唯物史觀の種々な缺點を理論的には覺つて居ながらも、やはり其の人の全人格性の奥底から生ずる深大な世界觀的要求に基づいて、色々な口實を設けて唯物史觀を固持せざるを得ない様な人々もあると信じて居るのであるから、（但し自己の利害關係からして、又は世上の人氣を顧慮して、本來は唯物論的人格典型に屬する人でありながら、觀念論者を裝ふ様な人も、亦同じ理由によりて本來は觀念論的典型に屬する人でありながら、唯物論者を裝ふ様な人もあり得るが、併し私は此處ではかゝる人々を除外して考へて居るのである）、將來の史觀は私が第三史觀と稱せんとするが如きものによりて、完全に統一されるとか、或は統一される可きものであるとか云ふが如き、大膽な主張を敢てなさんとするのではない。されば右に述べしが如き理由によりて、將來に於ても觀念史觀も亦唯物史觀も持續するであらう。併し夫れと同時に私は又、私と同じく觀念史觀にも亦唯物史觀にも、夫れ夫れの眞理を認めながら、しかも其の何れをも其の儘に承認することが出來ず、そうして其の人の全人格性の奥底から生ずる深大な世界觀的要求からして、兩者の眞理を總合する、より高い史觀を求める様な人々も決して少なくあるまい、又かゝる人々は益々増加するであらうと信じて居る。私は私が第三史觀と稱せんとするものは、つまりかゝる人々（自分も其の一人であると信じて居る）の世界觀的要求から生まれ、又之を最ともよく満足させる史觀であると信じて居るのである。

私は千八百九十七年に公にされたバールトの「社會學としての歴史哲學」第一卷第一版（同書の決定版は千九百二十二年に大に修正増補され、第三版及び第四版として出版されて居る）を、其の翌年米國に於て一讀して以來、幾多の歴史哲學の著作や、歴史哲學史の著作を閱讀するにつれて、今私が第三史觀と稱せんとするが如き史觀を漠然要求する傾向が、カナリ早くから現はれて居ることを學び、又私自身も漠然之を要求して居たのである。併し私の知る處では今日に至るも、まだ明確にかゝる史觀を立説した人はない様に思はれる。そうして又夫れには根本的に甚だ重大な理由があると思はれる。

抑々哲學の最とも根本な方針としては、只觀念論と唯物論との二方針が樹立し得られるだけであつて、兩者を總合する第三の方針と云ふが如き新しき方針は、到底樹立され得ないと考へられて居る限り、或は私が此の論文の次にヤハリ本雜誌に於て發表せんとする一論文「第三史觀の可能性」の中に、ヤ、詳しく考察せんとする處の、ソヴェト露西亞の國民的哲學としての辯證法的唯物論に於ける、最近の最とも重要な哲學的著作と思はれる、ミーティン監修の「辯證法的唯物論」中に主張されて居る如く、「すべての哲學的潮流や學説は、この唯物論と觀念論との二つの根本流派の一亞種である。各々の哲學學説は、公然とこれを述べ立てゝゐるにせよ、又はどうかしてそれを隠さうとしてゐるにせよ、必ずや觀念論の陣營か唯物論の陣營かに與みして居る。この二つの流派の外に立ち、それ「以上」に出で、それを「超越」せんとして、何か新しい哲學、新

しい觀念論哲學や、新しい唯物論哲學を創造せんとする要求は現代のブルジョア哲學者の或る者が自分の觀念論への所屬を蔽ひ隠すために用ひる手にすぎず、自分の唯物論を隠して公然と宣言し得ない氣兼ねか、又はどちらともつかない動搖、哲學的混ぜ物、折衷主義、混亂に外ならない」(廣島氏譯、四十五頁)ものにして、唯物論と觀念論との外には、何等の根本方針も樹立され得ないと考へられて居る限り、私の云ふが如き第三史觀が到底建設され得ないことは、云ふまでもなく明白である。隨ふて私の云ふが如き第三史觀が建設し得られる爲めには、先づ其の哲學的基礎として、觀念論と唯物論とを總合する第三の根本方針が、確實に樹立されなければならないことも亦、云ふまでもなく明白である。然るに從來の哲學史上に於ても、かゝる第三方針を要求する傾向は、漠然ながら時々カナリ強く現はれて居たと思はれるに拘らず、私の知る範圍内に於ては、又私の哲學的洞見力の淺薄なるが爲めか、從來かゝる第三方針を確實に樹立した哲學者は一人もない様に思はれる。そうして私は此の事が即ち私が云ふが如き第三史觀が、まだ確實に建設されて居ない最とも根本的な理由であらうと信するのである。

今上に述べし如く今日の露西亞哲學の代表的哲學者達は、唯物論と觀念論との外に立ち、それ以上に出で、それを超越せんとして、何か新しい哲學を創造せんとする人々の所説は、つまりは自分の觀念論への所屬を蔽ひ隠すために用ひる手にすぎないと云ふて居るのは、是れは今日の露西亞の狀勢に於ては眞實であるかも知れない。哲學としては或は世界觀としては、只唯物論の方

針のみしか、殊にレニン主義辨證法的唯物論のみしか唱へることを許されず、夫れ以外の何れの哲學を唱へる人々も、尙ほ又タトヒ唯物論であつても、レニン主義辨證法的唯物論でなければ何れの唯物論を唱へる人々も、哲學者として生存するを許されない様な、思惟の自由に對して極端な壓迫が加へられて居る、今日の露西亞の状態にありては、私が觀念論的人格典型と稱せんとするが如きものに屬する人々は、其の全人格性が純然たる觀念論を深刻に要求するに拘らず、生存する爲めには觀念論への所屬を隠くす手として、唯物論的に己れの哲學を粉裝せねばならないかも知れない。併し夫れと同時に、右の如き狀勢の下にある今日の露西亞に於ては、「自分の唯物論を臆して公然宣言し得ない氣兼ね」からして、觀念論を裝ふ様な人は全くあり得ない筈である。尙ほ現代文化國民間にありては、何れの國民に於ても、自分が唯物論を哲學上眞理と確信して居るならば、臆して之を公然宣言し得ないと云ふ様な人は、恐くはあるまいかと思はれる。それくらひな哲學的思惟の自由は、今日は何れの文化國に於ても、一般的には許されて居る筈である。現に我國に於ても、今日では唯物論を唱へ、又は唯物論を哲學的基礎として諸般の問題を論究し、論議して居る新進の學者論客は少なくない、否な随分多いだらうと思はれるが、併し夫れが爲めに特に迫害された人々や、大學を追はれた人々はまだないと思はれる。但し露西亞的唯物論を唱へて、直接間接に社會革命運動に關係した人々にありては、問題は異なつて居る。其等の人々は唯物論者であるが爲めに迫害されたのではなく、社會革命運動に直接間接に關係したが爲めに、

現代の社會組織を改良的には改造するか、併し其の根本原則は固く維持せんとし、かくて總ての社會的革命的革命運動を抑止せんとする政府によりて、國家的に處分されたものと思はれる。そうしてかゝる國家的處分は今日何れの文化國民に於ても行はれて居るので、現に露西亞に於ても、現狀及び政府が現に遂行しつつある方針を顛覆せんとする實際運動を起す人々や、かゝる實際運動を計畫する人々は、政府によりてドシ／＼處分されて居るのである。尙ほ又かゝる國家的處分は、何れの文化國にありても、露西亞に於てほど、苛酷ではないと思はれる。私は此の點に關する我國に於ける今日の事情を、右の如くに解するに非らずば、盛んに唯物論を唱へながら、社會革命運動には關係しないが爲めに、何等政府からの壓迫を受けない多數の思想家、學者が存在する所以は理解されなと思ふ。要するに今日の文化國民にありては、單に哲學上唯物論を唱へて居ると云ふだけの理由によりて壓迫され、迫害される様な事は決してあるまいと思はれるので、かくて今日の文化國民内にありては其の全人格性の深刻な世界觀的要求が觀念論的である人々に非らずば、觀念論を唱へないであらうし、又其の全人格性の深刻な世界觀的要求が唯物論的である人々に非らずば、唯物論を唱へないであらうと思はれるのである。何人でも、「自分の唯物論を臆して公然宣言し得ない氣兼ね」からして、觀念論を裝ふと云ふ様な必要は全くない筈である。そうしてミーンティン其他の「辨證法的唯物論」の著者達の目から、そう云ふ人々がある様に見へたり、「又はどちらともつかない動搖、哲學的混ぜ物、折衷主義、混亂に外ならない」哲學を唱へる

人々がある様に見へたりするのは、つまりは觀念論と唯物論とを總合する第三の根本方針を、其の全人格性の奥底から深く要求しながら、しかもまだかゝる方針を確立し得ない世界觀的人格典型が、本來存在するが爲めであらうと思はれるのである。

今日のソヴェト露西亞政府は、レニンが斷片的に説述して置いた辯證法的唯物論の思想を、論理的によく組織して、之を深く又廣く發展させ、以てプロレタリアト世界觀を建設することに、大に力を盡くして來たと思はれる。そうしてミーティン監修「辯證法的唯物論」を著述せる哲學者達は、ソヴェト露西亞政府の其の要求に應じて同書を著述したのであるが、併し私は其等の哲學者達も、決して夫れによりて自分等の利益を圖るが爲めではなく、自分等の人格性全體の深刻な要求を満足させるが爲めであらうと信じて居る。かくて私は其等の人々に對しては、辯證法的唯物論を主張する世界觀的人格權を認めるのである。併し夫れと同時に、私は觀念論を唱へる哲學者にも同等な世界觀的人格權が認めらる可きであり、更に所謂「どちらともつかない動搖、哲學的混ぜもの、折衷主義、混亂に外ならない」様な哲學説を唱へる人々にも、否な嚴密にはかゝる哲學説を唱へる哲學者に於て暗示されて居る處の、或は洞察され得る處の、私が哲學の第三根本方針と稱せんとするが如きものを唱へる人々にも、ヤハリ同等な世界觀的人格權が認めらる可きであると信んずる。世界觀としては只唯物論のみが眞理であるとか、又は只觀念論のみ眞理であるとか、又は只私が第三方針と稱せんとするが如きもののみが眞理であるとか考へるのは、人間

の世界觀的要求の全體をあまりに狭い、あまりに單調な、あまりに淺薄なものと見る謬見にして、私は眞實な人間の世界觀的要求は其の全體に於ては、モット廣大な、モット多様な、豊富な、モット深奥なものであるもの、少なくとも三つの根本方針を包括するものであると確信して居る。又そう信することによりて、人間の世界觀的人格性、世界觀的要求の眞の意義を、其の全體に於て廣く、深く、豊かに了解することが出來ると信するのである。

さきに述べし如くに私自身は早くから漠然ながら、今私が第三史觀と稱せんとするが如きものを、痛切に要求して居たのである。併しかゝる史觀を建設するには、上に述べし處によりて示せる如く、先づ其の哲學的基礎として唯物論と觀念論とを總合する第三の根本的哲學方針を確立せねばならないのであるが、然るに私は自分の專攻とする社會學の研究に専ら力を注ぎ、更に夫れと連關して其の他の諸般の社會科學や心理科學や生物科學などの研究にも注目せねばならなかつた爲め、自から第三根本方針を確立し得ると信するまでも、哲學を研究する暇を有せず、只私の科學としての社會學に於ては、私の學問論上から見て、（但し私の學問論に於ては、私は總ての科學は唯物論や觀念論の如き哲學の根本方針には全く關係せず、與へられたる現實な事實として物質や心や精神を、吾人の經驗上與へられるが儘に取扱ふ可きものにして、其等のものを何れかの一に還元せんとす可きでなく、之を企てるのは哲學或は形而上學の任務であると考え居るのである）、物質と精神とは與へられたる二つの經驗上同等に原本的なものであるとして取扱ひ、兩者の相互的作用及び關係を究明することによりて一切の社會的現實態の成立

及び變動を研究するのが、科學としての社會學の根本的任務の一であると、考へるに止まつて居たのである。然るに今より十年以前に京都帝國大學の教授の職を辭して以來、病ひと闘ひつゝ哲學の研究に、比較的によくの時間を獻げることが出來たが爲め、近頃に至つて大膽にも自から哲學の第三方針の少なくとも根本原理を確立して、以て第三史觀の哲學的基礎を据へ附け、かくて第三史觀を築き上げようと企だて始めて來たのである。それで私は本論文に於て以上述べ來りしが如くに、先づ私の第三史觀の概念を一般的に論述したる後、ヤハリ本雜誌に於て次に「第三史觀の可能性或は哲學的基礎」と題する論文、終りに「第三史觀の根本原理」と題する論文を公にして、以て私の第三史觀の理論の一般を示し、讀者の批判と示教とを受けて、之を益々深く又廣く發展したいと思ふのである。されば本論文に就ても、亦是れに次いで發表せんとする右の二つの論文に就ても、讀者諸氏が十分に批判を加へられ、又示教を垂れられて、私の第三史觀の理論の大成に援助を與へられんことを切望するのである。